ISSN 0387－7280

国際日本文学研究集会会議録（第12回）

PROCEEDINGS OF THE 12th INTERNATIONAL CONFERENCE ON JAPANESE LITERATURE IN JAPAN

(1988)

国文学研究資料館
NATIONAL INSTITUTE OF JAPANESE LITERTURE

情報資料室

PROCEEDINGS OF THE 12th INTERNATIONAL CONFERENCE ON JAPANESE LITERATURE IN JAPAN

1988

National Institute of Japanese Literature

1-16-10, Yutaka-cho, Shinagawa-ku,
Tokyo,142

第12回

目　次

あいさつ　小山弘志……3

研究発表

中国古典美学と日本民族自然美観の形成　楊永良……13

明石一族にみられる血の誇り——明石尼君を中心に——　金順姫……27

「舞姫」のポリフォニー　林正子……39

鷗外文学における眼差し　谷学謙……52

幕末に来日した人々と文学との出会い　望月洋子……67

現代日本幻想文学のユートピアと反ユートピアの概念——安定へのなつかしさ——　Susan NAPIER……76

芭蕉の季節感——時雨と五月雨を中心に——　兪玉姫……86

歌舞伎の中の「いき」——上方と江戸に於ける助六劇の違い——　Emi SCHINZINGER……105

黒本・青本と浄瑠璃絵尽し本——黒本「こく性や合戦」をめぐって——　高橋則子……121

公開講演

阿修羅の変容——須弥山の海から日本の舞台まで——　Karen BRAZELL……130

風流と見立て　郡司正勝……157

記録

日程および研究集会の経過……176

参加者名簿……177

国際日本文学研究集会委員会名簿……181

あ い さ つ

小 山 弘 志

小山でございます。この会も十二回ということでありますが、おかげさまで順調な経過をたどっております。これは、申すまでもなく、多くの方のご協力の結果でございます。主催者としてたいへん有難く思っております。

このプログラムでおわかりになりますように、随分色とりどりでございます。近世文学会とか、近代文学会といった場の発表であってもいいような内容のものも、勿論ございます。と同時に、そういった普通の学会ではちょっと見られないような題目も、加わっております。全体として、私どもの国際日本文学研究集会の、一種の色と申しますか、ある傾向が固まってきたようにも思います。これを、私どもとしては大事にしていきたいと思いますし、また、ひとつの傾向に安住することなく、絶えず世話役として見守り、対応していきたいと考えております。

今回も、前回同様、応募の数がかなりございまして、十八件ございましたうちから九つをお願いすることになりました。割愛しがたいものもあったのですが、時間の関係などから、やむを得ず半分にしぼらせていただいた次第です。今日は、六つ研究発表をお願いし、また明日午前中に三つ、そして午後には公開講演をお願いすることになります。大変ハードなスケジュールといってよろしいかと存じます。あるいは、日程を延ばすということも考えねばならない時期かとも思います。かといって、日数を延ばしても、今度はまたうまくいかないことが起こるかもしれない、このくらいが丁度よいのかとも思います。今その境目に来ているように思います。これだけハードなスケジュールになりますと、間に何かを入れるということができにくい。例えば、以前には、コンピュータを使ってオンライン検索のデモンストレーションをいたしましたり、また、当館の仕事をいろいろご紹介するといったこともあ

ったのですが、そういうことをする余地が、今のところなくなってしまっています。残念なようでもあり、あるいはそれが当然の姿かもしれないとも思っております。

九つの発表をお願いすることに関しましては、館内の者と、館外からも何人かの方にお加わりいただいている、委員会で決めたものでございます。館外の委員の方をご紹介いたしますと、青山学院大学の池田重教授が委員長でございます。以下五十音順に、清泉女子大学のアラン・ターニー先生、東京大学の芳賀徹先生、国学院大学の講師をなさっています長谷川泉先生、それから、この三月まで当館にいて四月から国際基督教大学に移られました福田秀一先生。そういう外部の方をお願いし、館内の委員とともに、九つ選ぶことにしたのでございます。

今回は、女性のご発表が過半数をかなり上まわるくらいに多くなりました。これは全く、たまたまそのようになったのでして、来年もそうなるかどうかは、予知できないことでございます。今の時代ですから、女性の数が多いとか少ないとかいうことは、問題にする必要のないことですが、私のような男性の立場で申しますと、今年は色どりのある会になったなと思います。

明日、午前中の研究発表のあと、午後に公開講演をカレン・ブラゼル先生にお願いしております。ブラゼル先生は、アメリカのコーネル大学の教授でありますが、この十一月から当館に客員教授としてお見えになり、明年の三月までご一緒に研究することになっております。これも特に申し上げるまでもないことかもしれませんが、私どもの客員教授として女性の方をお迎えしたのは初めてでございます。ブラゼル先生からは、「阿修羅の変容」というまことに魅力的な題のお話を伺うことになっております。先生の研究テーマは、日本の中世文学で、主として能についての研究をなさっておられます。今日のお話しはその能に関連があるのですが、最近は「高砂」とか「隅田川」とかの個々の曲に限らない、広く、能というものが中世においてどのようであったかということをお考えになっておられますので、表題のようなお話しを

していただくことになりました。

ブラゼル先生から「阿修羅の変容」という題を伺ってから、もうお一人、講演をお願いする方を考えました。そして、早稲田大学名誉教授の郡司正勝先生に決め、お願いいたしましたところ、ご快諾を得ました。いただきました題名が「風流と見立て」。かくして、連歌で申しますと、見事に〝ついた〟題のご講演を伺うことができるようになった次第でございます。郡司先生は、あらためて申し上げるまでもないと思いますが、歌舞伎の方面の大変な学者でいらっしゃいます。「風流と見立て」というのは、勿論歌舞伎にお触れになるとは存じますが、歌舞伎のみにとどまらない、もっと広い視点からのお話しになるのではないかと思っております。

公開講演も、このように色どりのあるものをお願いすることができました。さらに九つの研究発表、それぞれにいろいろと魅力的な題が並んでおります。この二日間、大いに満足していただけるのではないかと存じます。

なお、当館の仕事の近況について、ちょっと申し上げます。資料その他のオンライン検索を可能にするという仕事が、着々と進んでおります。「着々」というのを正確に申しますと、「着」の次に、ちょっと時間をおいて「着」になるというぐらいの速度ではありますが、着実に進んでおります。最後に一言、ただいま二階の展示室で、「名所と文学」というテーマのもとに、当館の持っております本の展示をいたしております。名所図絵の類が中心です。

それでは、今日の午後そして明日と、この会が実りの多いものになりますことを期待して、ご挨拶を終ることにいたします。

発　行

平成元年３月

編集兼発行者

国　文　学　研　究　資　料　館

〒142 東京都品川区豊町１－16－10

電話（03）785－7131 ㈹